

お互いを高め合う

校 長 武井 正明

先週9日、新潟県も高校野球の予選が始まった。開会式のエコスタに吉中の教職員の息子さんの姿もあった。高校球児にとって、熱い、最高の舞台が待っている。

神奈川県の開会式は7日横浜スタジアム。慶応の山田望意主将が堂々と選手宣誓、そこで異例の呼びかけをした。

「選手の皆さんにお願いがあります。今大会中、お互いのチームの好プレーに対して拍手や歓声を送り、たたえ合うことにしませんか。試合の中で、お互いを認め合い、試合の後、このチームと戦うことができ良かった、そう思えるいい試合が続く、そんな最高の大会にしませんか！」

カッケーなあ、山田主将。昔、自チームの二塁手の背が低かったので、バウンドが少しでも低くなるように、試合前早朝から、守備位置の前に大量の水を撒いていた自分が恥ずかしい。相手監督が、予定よりもずっと早く球場に来て「武井さん、なにやってんの？」「なんだかわからないんですけど、ここだけ異常に雨が降ったみたいなんですよ。おかしいなあ…」また、左投手牽制の際、一塁走者にわざと転ぶ「演技」をさせボークを誘う練習をしていたのも自分です。（実際、本当に成功しそうになってビックリ!!）…ただ、ボクはやっただけです。やろうと誘ったのはワカバヤシ君です。

そりゃ勝ちたい気持ちはみんな同じ。でもあくまでそれは、互いに最高のプレーをした結果でありたい。実に爽やか、これぞスポーツマンシップ。山田主将と全く同じ考えなのが、日本ハムの新庄剛志監督。彼は対戦相手のチームにケガ人が出ると、ベストメンバーで戦えないことを、心から悔しがるといふ。この人は互いにベストメンバーで戦った末の勝利こそ、価値あるものだと考えている。好きだなあ、新庄監督。今年はぜひ優勝してほしいなあ…。

大会やコンクールとなると、どうしても相手より優位に立ちたいものだ。チーム内でも控えではなくレギュラー、という気持ちが強くなるのは当然。でも、人生の主演は常に自分自身。負けたって、また頑張ればいい。そして、自分の可能性を諦めずに、粘り強く頑張った君は「人生の勝者」になればいいのだ。選手宣誓のように、自分に嘘なく「正々堂々と戦い抜」けばいい。栄冠は君に輝く。

そして、そんな経験ができるのは、人生の中でも限られた、ほんの僅かな時間なのだ。君たちは今、人生で二度と来ない、青春の入口に立っている。

泣いたり笑ったり、いろんな経験をして大人になっていきなさい。それが青春時代だ。